様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：２５４０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４８０８

研究課題名（和文）虚構世界との往還から自立と共生を目指す保育・教育プログラムの策定

研究課題名（英文）Formulation of childcare and education programs that aim for independence and coexistence from the back-and-forth between the fictional world and the real world

研究代表者
森　美智代（Michiyo, Mori）

福山市立大学・教育学部・教授

研究者番号：００３６９７７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「虚構世界との往還から自立と共生を目指す保育・教育プログラムの策定」を目的とし、多様な価値観が併存する社会を生きる子どもたちが、自らの足場を築き、他者と共に生きるための保育・教育プログラムを構想するものである。ただし、 実際の保育・教育現場をフィールドとして教育実践を行いながら構想・実施する予定が、COVID19という予測不可能な状況によって計画通りに進めることができなかった。そこで、COVID19以前に集めたデータをもとにした分析の考察・公表と、新たな研究方法の模索に時間を費やした。
結果として、観察法（エスノグラフィ）によるエピソードデータの分析という研究方法の提案に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来、子どもの「読み」の実態調査は、学力調査等のテストによって、子どもの生活実態とは切り離されて記録されることが多い。それに対し、教育現象を社会的・文化的現象と捉え、社会や文化に埋め込まれた状態での実態調査の必要性が指摘されている。本研究では、そうした流れの一つであるエスノグラフィによるエピソードデータを対象として、子どもの実態を明らかにした。
エピソードデータを、幼児教育から小学校教育への接続という視点から分析した結果、教師による筋書きから外れ、当初の目的とは異なる方向へと進む物語教材の授業が、子どもの意欲関心を原動力として、子どもの思考力・想像力を高めていく姿を描き出した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to "formulate a childcare/education program that aims for independence and symbiosis through the exchange between the fictional world and the real world," and to conceive a childcare/education program for children living in a society with diverse values to build their own foothold and live together with others. However, the plan to conceive and implement the project while conducting educational practices in actual childcare and educational settings as the field was not able to proceed as planned due to the unpredictable circumstances of COVID19. Therefore, we spent time considering and publishing analyses based on data collected prior to COVID19 and exploring new research methods.
The result was a proposal for a research method of analyzing episodic data using the observation method (ethnography).

研究分野：国語教育学

キーワード：保幼小接続　実態調査　エスノグラフィ　エピソード

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1990 年代後半より「荒れる・キレる」といった子どもの自立を巡る問題は、学校教育現場のみならず保育現場においても大きな実践的課題となっている。宮里 (2003)は、幼児期(3 歳～5 歳児)の荒れ・キレの特徴である衝動性と攻撃性に、2 歳児の姿をみるという (宮里六郎『「荒れる子」「キレる子」と保育・子育て』かもがわ出版、2001 年)。いわゆる「自分の感情をコントロール できずに衝動的に行動してしまう一面と、友だちへの関心の一面として、適切なかかわり方が分からずに時に攻撃的なものとなる」といった 2 歳児自我形成期に特徴的にみられる姿がそこにあるというのである。

以下の資料は、5 歳児クラスで「手押し車」のリレー競争をした際のエピソードを記述したものである。感情のままに攻撃性を見せる B 児が、虚構性の導入によって変容していく姿が描かれている。同時に、虚構性は周辺の子どもたちへも波及し、勝敗や優劣といった二分法とは異なる位相の価値観、すなわち「楽しい」場という教室空間の構築を実現していた。このように、虚構体験は「荒れる・キレる」といった 現代の子どもたちに対して、競争という現代社会における現実とは異なる価値観に支えられた場に生きることを可能にする。さらに、資料では、反目した状態で膠着していた友人関係をつなぎ直すことにも成功している。

資料 手押し車のエピソード

B 児はペアとなった押し手の子どもを「おまえがちゃんと持たへんからや！」「こんなんやったら負けるやんけ！」とすごい剣幕で怒鳴りつけていた。

その状況は大いに気になるものであったので、筆者は、B 児に対し「ガソリンは入れたのか？」と突然たずねてみた。B 児は(中略)表情も明るいものに一転させ、胸を張って「俺はクラウン(車種)だ!」と大声で答えた。(中略)そのやりとりを見ていた周囲の子どもたちも「車のライトはこれ(車役の子どもの両目)だ!」とウインクをして見せる、「こっちでもガソリンを入れるよー。いらっしゃーい」とガソリンスタンドの定員になる、などそれぞれが役割をもって遊びはじめた(神谷英司『子どもたちは遊べなくなったのか–「気になる子ども」とヴィゴツキー=スピノザ 遊び理論』三学出版、2011 年、p.52)

このことは、乳幼児期に限ったことではでない。児童後期(8 歳前後)以降の虚構世界との関係について、富田(2015)は「児童後期以降、人々は表面的には現実性の判断に基づいて、世界を空想か現実かのいずれかに分割して生きていくが、実際には、多元的世界を潜在意識の中に残存させ、それに大いに刺激を受け、支えられながら生きていくと考えられる(富田昌平「幼児期における 空想世界に対する認識の発達」兵庫教育大学博士論文、p.251)。」と述べ、児童後期以降における虚構の有用性を指摘している。

こうした事例は、虚構性が子どもの発達において、自立のための足場を築き、他者との共生を実現するための重要な役割を果たすことを示唆している。そこで、本研究では、乳幼児期と児童期における虚構世界と現実世界の往還が、子どもの自己肯定感や自他の視点への理解を高め、新たな価値観の獲得を促すツールになると仮定し、そのための保育・教育プログラムを策定することとした。

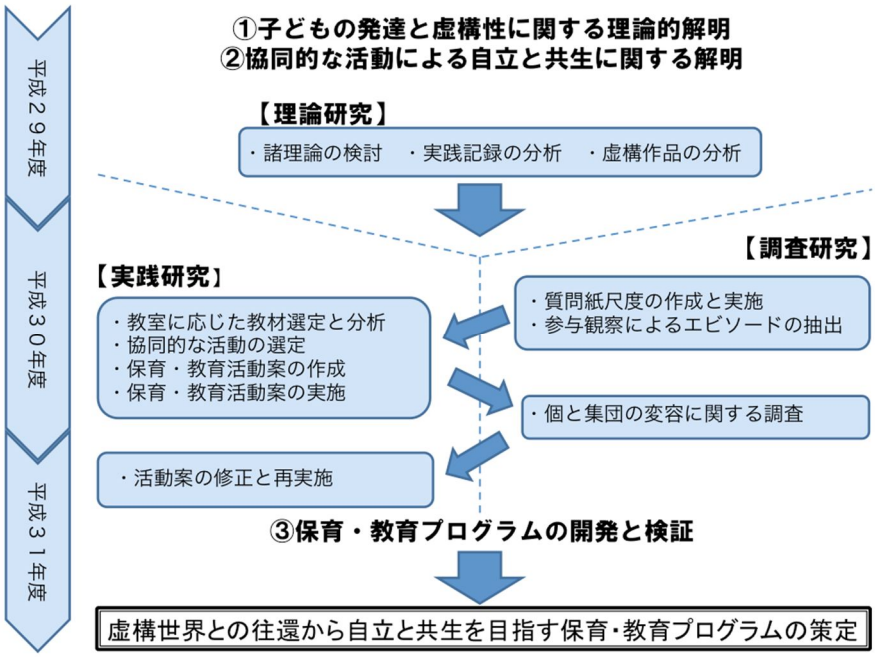
２．研究の目的

本研究は、「虚構世界との往還から自立と共生を目指す保育・教育プログラムの策定」を目的としている。そのために、本研究では、多様な価値観が併存する社会を生きる子どもたちが自らの足場を築き、他者と共に生きるための保育・教育プログラムを構想し、保幼小それぞれの学校種において実践的に検証する。具体的には、ごっこ遊びや文学教育における虚構の追体験と、協同的な活動に着目し、(1) 子どもの発達と虚構性との関連に関する解明、(2) 自立と共生に関する協同的な活動の解明、(3) 段階的な保育・教育プログラムの構想と検証を中心とした研究を行う。その際、本研究は、教育学や現代思想／哲学、文学、及び心理学における理論知と、各学校種で蓄積された実践知とが統合する複層的な学際研究となる。

３．研究の方法

研究の目的を達成するために図に示した計画を立案した。本研究は、(1) 理論研究(①文学理論 や心理学からの虚構性発達との関連の検討、②文学理論や心理学からの協同的な活動の検討)、(2) 調査研究(乳幼児及び児童の虚構作品の理解及び自己肯定感・役割取得能力との関連に関す

る調査)、(3) 実践研究(保育・教育活動案の作成及び実験的実施と検証)、という 3 段階で進捗させていく。また、調査・実践研究については、複数の保育所・幼稚園・小学校を研究協力校として、また複数の保育士・幼稚園及び小学校教諭を研究協力者として、質問紙法や参与観察による実態調査と、教室に応じた保育・教育活動案の作成及び実験的実施と検証を行う。
　便宜上、研究内容を 項目毎に区切って示したが、実際は部分的に相互に関連しながら、螺旋的に実施していく。



　(2) 調査研究と (3) 実践研究については、保育・教育現場の研究協力校との協力関係の中で進捗する部分が大きい。そこで、研究開始時には、公立小学校 3 校の小学校教諭に、「授業の参与観察」「実験授業の実施」等に関する研究協力者としての承諾を得た。さらに幼稚園については、福山市立大学附属こども園をはじめ、保育所 7 施設において、研究協力体制が確保し、今後も開拓を進めることとした。

４．研究成果

　ところが、保育・教育プログラムの策定を行う実践研究が本格化するところで、COVID19 の影響を受け、対応のために研究活動が著しく停滞することとなった。研究協力校である保育・教育現場においても、部外者の立ち入りが禁止となる期間が長く続き、調査はもちろん、新しい保育・実践の試み等の実施は困難な状況となった。そこで、本研究では、研究計画を大きく変更し、COVID19 以前に収集したデータの分析と考察を行い、新しい方向性を模索することに時間を費やした。

　COVID19 以前に収集できたデータは、子どもの読み書きの実態を調査したものである。本研究の調査においては観察法（エスノグラフィ）によってエピソードデータの収集した。
　主な研究成果としては、以下の 2 点を指摘できる。(1) 観察法（エスノグラフィ）によるエピソードデータの収集・分析という研究方法の提案、(2) 教師の方向目標に即した言葉がけが子どもの思考力・想像力を高めていく様子を描き出したこと、である。共に、2017 年に小学校 1 年生の教室にフィールド調査に入り、収集したエピソードデータを分析の対象としている。

　(1) については、子どもの読み書きの実態に関する調査と実態の考察として森美智代 (2021)「小学校入門期における子どもの書字実態に関する考察―観察法（エスノグラフィ）によるエピソードデータの分析を通して―」『国語科教育』90 集、全国大学国語教育学会にまとめた。
　内容としては以下のようなものである。子どもの読み書きの実態に関する調査は、幼児教育や特別支援教育の研究を中心にさまざまな蓄積がある。しかし、それらの多くが開発された言語能力検査や診断テストを用いた個別の子どもの実態調査である。これらは、例えば 4 月、7 月、10 月のように一定期間毎に同じ質問の調査を行う定点調査であり、子どもの生活実態とは切り離されて記録される。それに対し、教育現象を社会的・文化的現象と捉え、社会や文化に埋め込まれた状態での実態調査の必要性が指摘されている（エスノグラフィ、エスノメソドロジー、GTA、アクション・リサーチ等)。こうした観察法（エスノグラフィ）による実態調査は、言語能力検

査や診断テストが実施される間の期間（例えば 4 月から 7 月の間）の子どもたちの実態や、教師の指導の実態を描き出し、従来の調査の不足を補うことに貢献する。

そこで森（2021）では、小学校入門期における子どもの書字実態を、かな文字（平仮名と片仮名の習得）を中心にフィールド調査によって明らかにした。対象は、一般的な公立小学校 1 年生の 4 クラス（2 校 2 クラスずつ）、2017 年 4 月から 12 月にわたりほぼ毎日、教師 2 名と学生 1 名が観察者となり、観察法（エスノグラフィ）によるエピソードデータの収集を行ったエピソードは、フィールドノートの記述を「事実」と「コメント」に分けて Excel ファイルに蓄積した。観察における参与の度合いについては、観察者は休憩時間を中心に、個々の子どもと話をしたり、担任教師のノート添削を手伝ったりと自然な参与を行ったが、担任教師の指導法に対しては評価したり助言したりすることは行わなかった。本稿では、そのうち最も豊富なデータが収集できた 1 クラス 24 名（男子 13 名、女子 11 名）を中心に、入門期の子どもの書字実態について考察した。なお、考察対象とした 200 件程度のエピソードデータのうち、111 件が音韻意識に関わるエピソードであった。

結果としてわかったのは、子どもたちが個々に苦闘しながらもそれぞれの形でかな文字を習得していく過程である。その中でも共通して苦戦しているのは、音韻意識の形成と慣習的な規則の習得、すなわち①音韻分析力の習得と②表記法の理解であった。また、指導上の問題として、①音韻分析力の習得のための「手拍子をたたく」意義、④運筆に関わる諸能力の習得に関わる「うずまきをなぞる」意義の理解不足、大きすぎるマス目の問題を指摘した。教師が、子どもの文字の習得を単に「正しく書けたか否か」のみで評価してしまうと、個々の子どもの成長を見逃してしまうことにもなりかねない。そうならないために教師は、「言葉が文字にできない」という子どもの、文字との対峙（謂わば「言葉の本質」との出会い）に向き合い、「言葉はすべて文字にできる」という言語の万能性と不完全性との間に自らの言語観を問い直す必要がある。その上で、子どもの実態を子どもの側から観察し、子どもたちのペースを重視した指導を模索する必要がある。

（2）については、小学校入門期における教師の言葉がけに着目し、到達目標と方向目標という観点から言葉がけを分類し、どのような言葉がけが、どのような子どもの姿を導くのか、考察を行った。森美智代・倉盛美穂子・太田直樹（2020）「小学校入門期の授業における教師と子どもの相互作用の実態 ： 国語科と算数科授業で重視される目標の違いに着目して」『初等教育カリキュラム研究』8 号、初等教育カリキュラム学会として発表した。

内容としては、以下のようなものである。近年、幼児期と児童期の学びの接続が重視されている。幼児教育では、めざすべき姿へと向かう方向目標を重視し、小学校以上の教育では獲得すべき能力を明示化した到達目標を重視することが多い。到達目標とは、子ども達に獲得されなければならない内容と能力を実態的に明示した目標のことである。教師は、教科書や指導書に書いてあるねらいに即した形で授業を進め、子ども達は、教師により示された学習の目標を改めて自分の目標として自覚し、その自覚された目標に向けて学習を進めていく。一方、幼児教育では、幼稚園教育要領に記載されている「ねらいと内容」に基づきながら、保育者は子どもの実態に即して「～を味わう」「～を感じる」等の子どもの興味・関心が高まることをめざし、結果的に方向目標で保育を展開する。方向目標とは、子どもの育ちの方向性を示す教育目標のことである。

小学校入門期に開講時間が多い国語科と算数科では、方向目標と到達目標の比重は異なる。そこで、森ほか（2020）では、小学校入門期の国語科と算数科授業における教師と子どもの相互作用の実態を明らかにすることを目的とした。新 1 年生の国語科と算数科の授業を約 4 か月間観察し、教師の言葉がけと子どもの発話内容との関連を分析した。観察対象児は、A 小学校の 1 年生 2 クラスと、B 小学校 1 年生 2 クラス、全児童数は 106 名であった。A・B 小学校は共に一般的な公立小学校である。観察時期は 2017 年 4 月から 7 月で、観察手続きとしては以下の通りである。観察者は、小学校教諭経験 20 年以上の教師 2 名である。各々A 小学校担当、B 小学校を担当する体制をとり、それぞれ小学校において、入学当初の 4 月から 7 月までの間、ほぼ毎日、国語科と算数科の授業について観察を行い、子どもの学びの姿についてフィールドノートを作成した。採集した発話記録から、(1) 教師の言葉がけ（「到達目標」に即した言葉がけと「方向目標」に即した言葉がけ）を中心とする一連の子どもの反応をエピソードとして抽出し、＊（2）教師の言葉がけ（「到達目標」に即した言葉がけ・「方向目標」に即した言葉がけ）の分類と、(3) 子どもの発話内容の分類について、執筆者 3 名と観察者の教師 2 名の計 5 名で協議した。

結果として明らかになったのは以下の通りである。教師の授業の進め方に関する言葉がけを、「到達目標」に即した言葉がけと、「方向目標」に即した言葉がけに分けると、国語科で 74%、算数科では 89%が「到達目標」に即した言葉がけであった。このことは、小学校入門期における教師が、授業を教師の意図した方向へと展開するよう働きかける傾向にあることを示している。幼児期における、遊びの中で数量や図形や文字に興味を持ち、表現する姿（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（厚生労働省、2017）から鑑みるに、この結果は、小学校入門期の子ども達にとって決して小さくない転換（段差）であり、大きな課題である。

また、算数科で 89%と国語科より高かったのは、算数科が国語科よりもねらいが具体的で明確であるという点に起因している。国語科は、ねらいが明確でないため、教師は「到達目標」に即した言葉がけを意図したものの、結果的に「方向目標」として機能する言葉がけを生じやすい。そのため、子ども達にとっても悩んだり思案中であったりする経験は増えても、「理解する」「できる」という実感を重ねる機会は少なくなりがちである。一方、算数科においては、ねらいが明確であるため、「到達目標」に即した言葉がけの下、子ども達が「理解する」「できる」という実感を得る経験を積み重ねることが可能である。しかし、視点を変えると、国語科は悩んだり思案中であったりする経験に富んでいるため、子どもの興味関心を最重視する授業を展開することで、子ども達の想像力・思考力を高めることが可能となる。一方で、算数科は、教師が「理解する」ことや「できる」ことに偏重しすぎると、子ども達の興味関心を抑止し、試行錯誤の機会を奪う授業展開へと陥りかねない。

したがって、小学校入門期の国語科と算数科では、子ども達の学び方が異なるため、教師の子ども達への関わり方も変えていく必要があると言える。国語科においては、到達目標を徹底すべきところではねらいを具体化し、「到達目標」に即した言葉がけを行うようにしていく必要がある。また、方向目標が有効な場面では、「方向目標」を意図した言葉がけを行うことで、学びを多声的で創造的なものへと変えていくことができる。一方、算数科においては、「到達目標」の設定において、子どもの認知発達を考慮するのか、数学的な系統性に拠るのかを、子どもの状況や実態に応じて判断し、言葉がけを行っていくことが求められる。その際に重要となるのは、「到達目標に至っていない」と捉えられる子どもの姿を、子どもの学びの過程もしくは認知的な発達面から捉えることである。言い換えると、教師の意図から外れた子どもの発話内容の中に、子どもの学びの姿をどれだけ見出すことができるかが入門期の鍵となる。幼児教育において、保育者が子どもの遊びの中に数量や図形や文字への興味を見出すのと同じように、小学校においても、教師が子どもの反応から、言語的あるいは数理的な捉え方を自分のものにしていく過程にある子どもの実態を見出すことである。ゆえに教師には、言語あるいは数理に対する教科内容知が必要である。その上で、教師には上記のような判断と意図的な言葉がけを行っていくことが求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 森 美智代	４．巻 9
２．論文標題 論理学的視点からみた文学教育の目標論の探究―「可能世界」という理論的装置を手がかりとして―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森美智代・倉盛美穂子・太田直樹	４．巻 8
２．論文標題 小学校入門期の授業における教師と子どもの相互作用の実態 ： 国語科と算数科授業で重視される目標の違いに着目して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 初等教育カリキュラム研究	６．最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 光本弥生	４．巻 11
２．論文標題 虚構的保育活動場面における乳幼児の変容と指導課題についての考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 広島修道大学教職フォーラム（教職課程年報）	６．最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 光本弥生	４．巻 10
２．論文標題 幼小「接続期」の虚構的活動における創造的想像力についての一考察	５．発行年 2018年
３．雑誌名 広島修道大学修大教職フォーラム	６．最初と最後の頁 ４‐11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 森 美智代
2．発表標題 自ら学ぶ子どもを育む国語教室の環境構成―モンテッソーリ・メソッドを手がかりとして―
3．学会等名 第5回初等教育カリキュラム学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 森美智代
2．発表標題 小学校入門期における子どもの書字実態に関する考察
3．学会等名 全国大学国語教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 倉盛美穂子，長原千香子，森美智代，新開美晴
2．発表標題 接続期における保育者と小学校教諭の指導観の差異
3．学会等名 日本発達心理学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 光本弥生
2．発表標題 幼小「接続期」の虚構的活動と自立形成の課題
3．学会等名 日本臨床教育学会 第8回研究大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 森美智代・倉盛美穂子・太田直樹
２．発表標題 小学校入門期における国語科・算数科の課題
３．学会等名 初等教育カリキュラム学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計10件

１．著者名 広島保育問題研究会　集団づくり部会	４．発行年 2017年
２．出版社 ㈱新読書社	５．総ページ数 134
３．書名 本当に認め合って育ち合う保育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	光本　弥生 (Koumoto Yayoi) (80280155)	広島修道大学・人文学部・教授 (35404)	
研究分担者	倉盛　美穂子 (Kuramori Mihoko) (90435355)	日本女子体育大学・体育学部・教授 (32671)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関